

令和6年春 大学院医学薬学府学位記伝達式 学府長式辞

医学薬学府の修了生の皆さん、学位取得、誠におめでとうございます。努力と研鑽を重ね、厳しい審査に耐え、立派な学位論文を纏められた皆さんの努力に心より敬意を表します。また皆さんを支えていただいたご家族、関係者の方々へ医学薬学府の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

皆さんの修了に際し、医学薬学府長として、一言お話をしたいと思います。

皆さんもご存じのことと思いますが、今年の7月から20年ぶりに我が国の紙幣が新しくなります。一万円札に「近代日本経済の父」と呼ばれる実業家、渋沢栄一氏、五千円札に日本で最初の女子留学生としてアメリカで学んだ津田梅子氏、千円札に破傷風の治療法を開発した細菌学者の北里柴三郎博士、それぞれの肖像がデザインされています。本日は、北里柴三郎博士に後を引き継ぐまで、この20年間に渡り千円札の顔となっていたやはり日本を代表する細菌学者である野口英世博士についてお話をしたいと思います。

野口英世博士は明治9年（1876年）に現在の福島県猪苗代町で生まれ、幼少期にやけどを負って不自由となった左手の手術を受けたことがきっかけで医師を志します。当時の医術開業試験に合格したものの、左手のけがが原因で臨床医の道には進まず、基礎医学研究者としての歩みを始めます。北里柴三郎博士の紹介状をもって、アメリカに研究の場を求め、最終的にロックフェラー医学研究所で研究活動を行いました。野口博士の研究所での働きぶりは、「日本人は睡眠を取らない」などと揶揄されたり、「人間発電機」と綽名されたりするぐらい猛烈に研究に邁進し、多数の論文を発表しておりました。残念ながら野口博士の業績のうち、後年になって否定されたものは少なくありませんが、梅毒の病原体を患者の脳や脊髄中で発見したことなど細菌学者として、当時の名声を得たことは間違いないでしょう。

野口博士の生涯を描いた伝記は皆さんもこれまでに読んだことがあるかと思いますが、渡辺淳一氏が執筆した「遠き落日」という小説にはありのままの人間野口英世が描かれております。そのような書き物の中で、野口博士の残した言葉がいくつも伝えられておりますが、その中の一つを紹介したいと思います。それは「自分のやりたいことを一所懸命にやり、それで人を助けることができれば幸せだ。」という言葉です。皆さんは、最近、何か一生懸命取り組んだことがあ

りますでしょうか。昨今は何かに一生懸命取り組むこと自体格好の悪いことと思われたり、それが仕事だったりすれば「それってブラックなんじゃないの」と言われたりもします。しかし、何か大きなことを成すことの第一歩は、一生懸命になることから始まります。そして、そのことが誰かの助けになるのであれば、それは素晴らしいことでしょう。まずは、自分のやりたいことを見つけ、それに一生懸命になること、今後社会のリーダーとなるであろう皆さんにはそのことを是非実践していただきたいと思います。皆さんの一生懸命は、必ず人を助けることに繋がり、皆さん自身をも幸せにすることと確信しています。

本日、学位を取得した皆さんが、さらなる飛躍を続けることを期待して、私の式辞とさせていただきます。

本日は誠にめでとうございました。

2024年3月22日

大学院医学薬学府長 小椋 康光

